

全国的にCOVID-19が猛威を振るっていますが、今回は若い人も咽頭痛で食事が摂れずに救急車を呼ぶことが前より多い気がします。皆さんも気を付けてくださいね。

さて、中でもリアル学会がちらほら開催されています。研修医の先生の多くが、一度くらいは学会発表の機会を得ています。たまたまチャンスがない人もいますが、できるだけ早いうちから学術活動に携わるのは良いことだと思っています。

国立病院機構は以前から独自の学会（共済病院もありますが、国立病院機構の方が少し規模が大きいと思います）があります。比較的発表がしやすい環境にあるので、学会デビューには都合が良いのです。

ですが時々、メジャーな学会の地方会や総会に出す機会が巡ってくる人もいます。

昨年もニュースレターに書きましたが、今年も救急科で経験した症例をまとめて発表してくれた先生がいました。横浜で行われたリアル学会なので、出かける楽しみは少なめですが、当人はそれどころではないプレッシャーを感じていたようです。

ちょっと活舌が心配になったところもありましたが、オーラルセッションできちんと発表できていたのは立派でした。

科学者であることは、臨床家であるのと同様にとっても大事な医師としての側面です。日々、リサーチマインドを持って診療をするのはとても大切です。

私の最初の学会発表、たぶん研修医の時に経験した破傷風患者の循環動態を連続心拍出量計測で見たものだった気がします。座長推薦になったのに論文にせず、指導医の先生にとっても申し訳なく思う気持ちが、30年経った今でもなくなりません。

途中で呼吸困難になっちゃった、とのこと。
でも最後まで頑張りましたね。

